

## 日本のスピリチュアリティに基づく医療とまちづくり

カール・ベッカー先生

日本は世界に先駆けて超高齢社会に入った。いずれは全ての先進国もそうなるからこそ、日本がこの超高齢社会にどう向き合うのかに注目している。今までの医療・福祉政策のおかげで、日本は確かに長寿国になったが、どの国も経験したことがないほどの借金を背負ってしまった。資源の乏しい日本が、どうやって国債を全額返済するのか、そして高騰する医療費をどうするつもりなのか。私は、その鍵を握るのは、日本人のスピリチュアリティに基づく地域の協力体制と健康づくりだと考える。

日本人は昔から、生と死は連続したものであり、死者のスピリッツ（御霊、魂）はすぐ近くにいて、自分を見守ってくれと考えてきた。さらに自分たちの先祖だけでなく、山川草木に至るまで、自然界の全てに魂が宿ると考えた。別な見方をすれば、日本人のスピチュアリティは「何をするか」ではなくて「どうするか」を大切にす。世界中の人がお茶を飲み、花を活け、字を書くが、日本人はそれをスピリチュアルな茶道、華道、書道として確立した。つまり日本では、どういう心（スピリット）で行うかが重要である。大自然と自分との目に見えない絆を大切にする思いが、根底にあるのだろう。

エックス線やラジオ波など、目には見えないが科学的に証明できるエネルギーによって、私たちの生活は便利になった。しかし、もっと大切なのは、自然と私たちの心を結び、健康を増進してくれるエネルギーであり、それを「気」や「霊」という言葉で表現してきた。この考え方は日本独自のものではなく、インディアンやイヌイトなど、世界の伝統文化の中にもあった。しかし、消費主義や物質主義の無謀な「近代化」の中で、とっくの昔に忘れてしまい、少なくとも普通の欧米人の意識にはない。日本は明治以降、都市化と産業化を短期間で実現したので、この伝統的な感覚が残っている。世界の人々がもう一度この感覚に気付くためのメッセージを発信する使命が、日本にはある。

大切になるのが、日本の自然の美しさと、日本のスピリチュアリティに基づくお互いの支え合いである。これなしには、日本の未来はないと思う。